



読書館

単行本

▼ヒロコ・ムトー著「一度しかない人生だから」

度しかない人生だから」いじめ克服を願って全国の小中学校で講演する「心の宅急便」の活動を続ける著者が半生をつづつた。作詞家・脚本家の仕事に打ち込んだ日々、娘と一緒に苦しんだいじめ、88歳で豆紙人形作家になった母、最後までがんと闘いをあきらめなかつた夫。その家族に支えられて63歳で始めた「心の宅急便」を通じて「自分らしく生きる」意味も知っ

た。副題の「六十年代からできること」には「今日は残りの人生の始まりの日」との思いを込めた。(海草社・1300円)

▼宮沢重夫著「ボブ・ティラン・グレスト・ヒット第三集」

2001年9月1日。あの9・11に先立つこと10日、新宿歌舞伎町の雑居ビルで、死者44人を出す火災が起きた。泥酔しており記憶の定かでない中古レコード店主は、自分が放火犯なのではないかという想像に取りつかれる。実際に起きた火災事故をもとに、9・11前後、アジアの片隅で起きた、一つの世界の姿容を描く。

(新潮社・1575円)

▼長嶋有善「安全な妄想」

芥川賞作家の著者が、頭の中で荒れ狂う妄想を甘辛いエッセーに仕立て上げ

た。天下無双の爆笑世界。出版社から送られてくるお披露への不満と要望について、木星と土星の巨大さは気味悪くはないか。作家仲間との公開トークで、難しい話について行けずに黙りこくってしまったなど、ひたすらボケてヨケまぐる自意識過剰気味のどうでもい話に思わず笑いがもれる。

(平凡社・1470円)

▼飯沢耕太郎著「きのこのチカラ」

写真評論家として知られる著書が、長年にわたるきのこのへ偏愛を通して見えてきた新たな世界を語る。「地下に広がる巨大な森」としての菌糸のネットワークへの驚きを糸口に、きのこの文学、きのこの映画、きのこの女子まで、きのこの的なるものへの愛着が生んださまざまなカルチャーを紹介。きのこのには人を幸せにするチカラがある、

との持論を展開する。図版多数。(マガジンハウス・1575円)

▼南部さおり著「児童虐待」

「絶対」ところか、ますます増えている児童虐待。なぜ悲劇は起こってしまふのか。防ぐ手だてはあるのか。実際にあった事例を法医学の立場から解説し、予防策を考える。「しつけ」と「虐待」の違い。子供が出しているSOSを讀み取る方法。幼児の脳の壊れやすさ。泣き声に対する対処の仕方など、これから親になる人や、子育てに悩む若い父親母親に読んでほしい。

(教育出版・1470円)

▼タラ・バーカー「ボー」

著「夫婦ケンカで男はなぜ黙るのか」

夫婦間で問題が起こったとき、妻は話し合おうとするが、夫は新聞を読んだりテレビを見て沈黙する。それは性別の違いではなく、家庭内でどちらが権力を握っているかの問題だ。科学的分析を基に、夫婦が抱える危機を解決するためのヒントを探る。家事分担の不平等、育児不安、セックスレスなどに隠された人間関係の不安定さに常識が覆る。古草秀子訳。(NHK出版・2415円)

新書

▼外添要一著「孫文とその指導者の資質」

今年是中国の辛亥革命から100年。参院議員で国際政治学者でもある著者が、革命の主導者・孫文の実像を多数の文献をもとに分析している。革命を支えた九州の人々の存在など歴史をひもときながら、困難な時代にあるべきリーダー論、日中関係の重要性などを指摘して

いる。(角川oneテーマ21・760円)

▼矢内由美子著「サッカー・ジャパンの流儀」

サッカー男子日本代表監督を務めるザッケローニは、どのようにチームを作り替え、選手的心をつかんだのか。母国イタリアでの経験。先進的な戦術。気配りに満ちた人心掌握術など、ブラジルW杯予選の観戦がさらに面白くなるサッカー入門書。(学研・777円)

文庫

▼適業収著「いたこエ」

「先生、日本はダメですか?」「ダメだな」

哲学者二ツエが高校時代の同級生に降臨! 目的は、世界危機の元凶であるアラトン・カントの子孫らしいオレを殺すため。コ